

<2024年度 第4回定例研究会>

ソーシャルワークの世界とその魅力を考える

～それでもかかわる、つながることをあきらめない
ソーシャルワークの可能性がそこにある～

講演：空閑 浩人（同志社大学社会学部社会福祉学科教授）

日 時：2025年1月30日（木）18:30～20:00
会 場：熊本学園大学 14号館 1411教室

1. 講師紹介

講師の空閑浩人先生は、福岡県のご出身で、同志社大学文学部を卒業後、一般企業勤務を経て身体障害者福祉施設の職員として現場経験を積まれた。その後、同大学院へ進学し、福岡教育大学を経て、2004年より同志社大学で教鞭をとられている。現在は、日本ソーシャルワーク学会副会長や日本ソーシャルワーク教育学校連盟常務理事を務めるなど、日本のソーシャルワーク教育・研究を牽引する立場にあると同時に、生活困窮者支援や地域づくりに関する多数の著書・編著を持つ実践家・研究者である。

2. 講演要旨

格差や貧困、差別や分断が依然として解消されない現代社会において、ソーシャルワークには何ができるのか、その根源的な意義が問われている。本研究会では、「それでもかかわる、つながることをあきらめない」を副題に、空閑先生ご自身の現場経験や、文学・映像作品など親しみやすい文化的リソースを紐解きながら、ソーシャルワークの「魅力」と「可能性」について講演いただいた。講演では、支援者が専門性の高みから対象者を指導するのではなく、同じ時代を生きる一人の人間として「対話」を重ね、痛みや喜びを分かち合うことの重要性が強調された。会場には学生、教職員、地域の福祉関係者が集い、困難な時代における「希望」としてのソーシャルワークのあり方について深い共有がなされた。

3. 講演概要

講演の冒頭、空閑先生はNHK連続テレビ小説『虎に翼』や小田和正氏の言葉を引用し、ソーシャルワークとは「人ひとりを大切にする」営みであり、辛い経験や試行錯誤の過程こそが、人々からの信頼を築く基盤になると説かれた。支援の現場は決してきれいごとだけではなく、思い通りにいかない苦しさもあるが、だからこそ「通りすぎてきた苦労は信用できる」というメッセージは、参加者に強い共感を呼んだ。

中盤では、ソーシャルワークの核心にある「対話」と「関係性」について、ドラマ『silent』を題材に議論が展開された。支援者が良かれと思って発する言葉が、時には相手にとって「うるさい」ものになり得るという視点は、専門職の独りよがりな姿勢への自戒として響いた。空閑先生は、言葉は「わかり合えないことがある」という前提の上で、それでも「一緒にいたい」と思うために紡がれるものであり、支援者は当事者から「この人になら話したい」「一緒にいたい」と思われる存在でなければならないと語られた。ここには、単なる情報のやり取りではない、魂の触れ合いとしての「対話」の重要性が示唆されている。

また、ソーシャルワークの共通基盤として「10のこと」が提示された。個人の問題を自己責任に帰すのではなく、社会的・構造的な背景（矛盾や理不尽さ）に目を向けること、そして「もしかしたら、その人は私だったかもしれない」という想像力を持つことの重要性が語られた。これは、支援する側／される側という固定的な境界線を超え、互いに弱さを認め合い、補い合う関係性へとつながる視点である。

終盤では、『ONEPIECE』や『鬼滅の刃』、『Mrs.GREENAPPLE』の楽曲などの現代文化を引用しつつ、ソーシャルワークが目指すべき「希望」について語られた。それはユートピアのような非現実的なものではなく、「腹いっぱい飯が食える」といった日常の尊厳を守ることであり、どんなに小さくても「生きていてほしい」と願う肯定的な関わりである。最後に、不透明で殺伐とした時代だからこそ、福祉の実践があること自体が社会の「希望」であり、私たち支援者は、地域の人々にとって「ともに前を向こうと思える」存在であり続けたいと結ばれた。複雑な時代だからこそ、日々の小さなかわりの中に「希望」を見出し、一人の尊厳を守り抜くこと。そのソーシャルワークの原点を再確認し、参加者がそれぞれの現場で「世の中まだまだ捨てたもんじゃない」と思える実践を積み重ねていく決意を新たにす機会となった。

(研究会報告担当者：孫 希叔)